

中学生の歌唱における「音痴」意識

—質問紙による実態調査を通して—

*小畑千尋

Inferiority Complex toward Singing in Japanese Junior High School Students:
Analysis by Questionnaire Survey for “Onchi” Consciousness

OBATA Chihiro

要旨

本研究の目的は、中学生318名を対象として行った「音痴」意識を中心とした質問紙調査の分析を通して、中学生自身の「音痴」意識について、男女別による差異、発声・変声期との関連も含めて明らかにすることである。分析の結果、生徒の約5割が自分自身を「音痴」だと意識しており、小学生の頃から「音痴」意識を持ち始めた生徒と家庭で「音痴」だと言われた経験を持つ生徒が多いことがわかった。自身の発声に対する認識については、特に女子において「音痴」意識との関連がみられ、男子については、変声を理由に自身を「音痴」だと意識するとは一概に捉えられないことが明らかとなった。男女別による差もみられ、個々の生徒に対応した、歌唱も含めた声の指導を行うことの重要性が示唆された。

Key words : 「音痴」意識、歌唱、中学生、発声、変声期、思春期、内的フィードバック

1 本研究の背景と目的

成人の中には、歌唱において自分自身のことを「音痴」だと思っている人が少なくない。筆者が2000年に小学校教員養成課程に在籍する大学生を対象に行った質問紙調査では、「非常に『音痴』だと思う」と「少々『音痴』だと思う」を合わせて45.9%の学生が自分自身を「音痴」だと意識していた(小畑 2002)。さらに、2013年に同じく小学校教員養成課程に在籍する大学生を対象に同調査を行った結果、自分自身のことを「非常に『音痴』だと思う」と「少々『音痴』だと思う」を合わせて45.0%の学生が自分自身を「音痴」だと意識しており(小畑 2018)、2000年と2013年の結果からは「音痴」意識を持つ学生の割合に大きな違いは認められなかった($\chi^2=2.94$, $df=3$, $p>.05$)。そして「音痴」だと意識し始めた時期については、2000年、2013年の調査共に「中

学校の頃」と回答した学生が最も多かった。

日本の中学校では、音楽の授業に加え、校内合唱コンクールなど歌唱活動を行う機会が多々ある。中学生に対する歌唱指導で留意されることとしては、主に変声期の取り扱いが挙げられ、中学校学習指導要領の「内容の取扱い」においても、変声期についての記述がみられる(文部科学省 2017)。しかし、生涯にわたって影響する可能性もある生徒自身の「音痴」意識については、焦点があてられることは極めて少ない。また、変声と生徒自身の「音痴」意識との関連についても明らかではない。

そこで本稿では、中学生自身の「音痴」意識について、質問紙調査を通して、男女別による差異、発声・変声期との関連も含めて、その実態を明らかにすることを目的とする。

* 音楽教育講座

2 方法

2.1 調査対象者・手続き

2016年11月に、宮城県の公立A中学校全校生徒（欠席者を除く318名：男子165名、女子153名）を対象に質問紙調査を実施した。生徒たちには、成績とは一切関係しないことを調査実施前に伝え、質問紙は無記名で、それぞれの生徒に付与したID番号を記入してもらい、データはすべてID番号で管理した。なお本調査は、宮城教育大学「ヒトを対象とする研究に関する倫理委員会」の承認を得て行った。

2.2 調査内容

質問項目は、「音痴」意識に関する質問については、大学生を対象とした調査（小畑 2002, 2018）と比較検討するため、可能な限り発問の文言を同じにした。また発声、変声期等に関わる質問項目の文言については、調査対象校であるA中学校の音楽科教員と検討を行った。今回の分析に用いた具体的な質問項目は、表1のとおりである。なお、実際の質問順は異なる。

表1 質問項目

質問1：あなた自身、自分を「音痴」だと思いますか？
1. 非常に「音痴」 2. 少々「音痴」
3. ほとんど「音痴」ではない 4. 「音痴」ではない
質問2：いつ頃から自分自身を「音痴」だと思ようになりましたか？
1. 保育園・幼稚園 2. 小学校 3. 中学校
質問3：他者（親、兄弟姉妹を含む）に「音痴」だと言われたことがありますか？
1. ある 2. ない
↓
質問4：誰から「音痴」だと言われたことがありますか？あてはまるものすべてに○をつけてください。
1. 学校の先生から 2. 親から
3. 兄弟姉妹から 4. クラスメイトから
5. ピアノなどの習い事の先生から
6. そのほかの人から（具体的に：_____）
質問5：あなたが歌う時、発声の方法が上手くないと思いますか？
1. とてもそう思う 2. ややそう思う
3. あまりそうは思わない 4. 全くそうは思わない
5. わからない
質問6：男子は、あなたの変声（声変わり）の時期についてお答えください。
1. すでに変声期を終えたと思う
2. 現在変声中だと思う
3. まだ変声期に入っていないと思う
4. わからない

3 結果

3.1 中学生の「音痴」意識

1) 中学生自身の「音痴」意識

質問1「あなた自身、自分を『音痴』だと思いますか？」について、全校生徒を総合して、「非常に『音痴』」に11.0%、「少々『音痴』」に36.8%、合計47.8%の生徒が自分自身を「音痴」だと思いと回答した（図1参照）。

次に、学年別に集計した結果を図2に、男女別に集計した結果を図3に示す。

学年別では、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」と回答した生徒は、1年生が46.6%、2年生が52.4%、3年生が42.9%となり、2年生が他の学年よりも自分自身を「音痴」だと意識している生徒の割合が高い結果となった。さらに、「『音痴』ではない」と

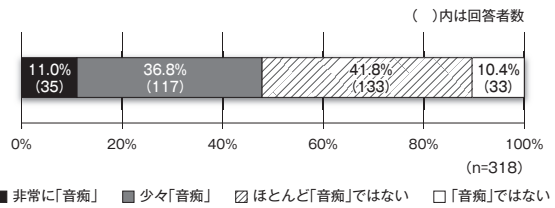


図1 質問：自分自身を「音痴」だと思いますか？

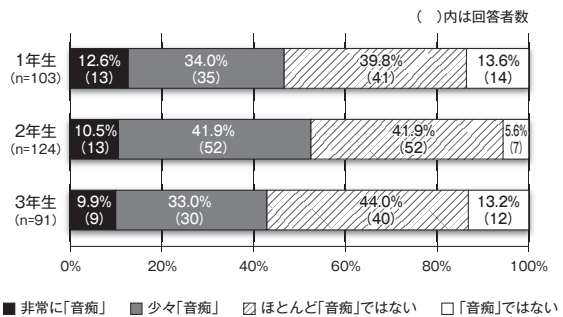


図2 質問：自分自身を「音痴」だと思いますか？（学年別）

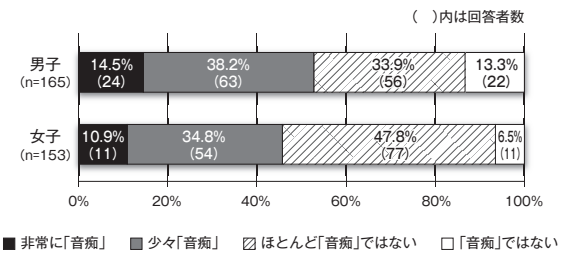


図3 質問：自分自身を「音痴」だと思いますか？（男女別）

回答した生徒の割合については、1年生が13.6%、3年生が13.2%であるのに対し、2年生は5.6%と低かった。この各学年のデータをカイ二乗検定で比較した結果、1年生と2年生 ($\chi^2=8.93$, $df=3$, $p<.05$)、2年生と3年生 ($\chi^2=8.49$, $df=3$, $p<.05$) の間に、それぞれ5%以下の有意差があり、生徒自身の「音痴」意識の割合に違いが認められた。

男女別では、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」と回答した生徒の割合は、男子は52.7%、女子は45.7%となり、男子の方が女子よりも自分自身を「音痴」だと意識している割合が高い。また、男子では「ほとんど『音痴』ではない」が33.9%、「『音痴』ではない」が13.3%であるのに対して、女子は「ほとんど『音痴』ではない」は47.8%と高く、「『音痴』ではない」は6.5%と低い割合であった。この男女別のデータをカイ二乗検定で比較した結果、0.1%以下の有意差があり、生徒自身の「音痴」意識の割合に違いが認められた。 ($\chi^2=15.22$, $df=3$, $p<.001$)。

2) 自身の「音痴」意識と「音痴」意識を持ち始めた時期との関連

質問2では、質問1「自分自身を『音痴』だと思いますか？」で「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」だと思っていると回答した生徒を対象に、自分自身を「音痴」だと意識し始めた時期について問うた。結果を表2に示す。

「音痴」意識を持ち始めた時期について、回答した生徒全体の61.3%が、「小学校」の頃と回答した。「非常に『音痴』」と「少々『音痴』」のそれぞれの回答をみると、「非常に『音痴』」だと思っている生徒については、「小学校」の68.6%が最も高く、次に「中学校」

の17.1%という順となった。一方、「少々『音痴』」と知っている生徒についても、「音痴」だと意識し始めた時期として回答した割合は、「小学校」の59.1%が最も高く、続いて「中学校」の37.4%であった。

「非常に『音痴』」、「少々『音痴』」の両群において「小学校」と回答した生徒の割合が高いが、「少々『音痴』」だと思っている群の方が、「中学校」と回答した生徒の割合が高い。「非常に『音痴』」と「少々『音痴』」の「小学校」「中学校」それぞれの割合をカイ二乗検定で比較した結果、1%以下の有意差があり、回答した割合に違いが認められた ($\chi^2=7.65$, $df=1$, $p<.01$)。

「音痴」意識を持ち始めた時期について、男女別に集計した結果を表3に示す。男子では、「小学校」が55.2%、「中学校」が39.1%、女子では、「小学校」が69.8%、「中学校」が23.8%であり、両群共に「小学校」の割合が高く、男子よりも、女子の方が「小学校」と回答した割合が高い。この結果について、「小学校」「中学校」の男女それぞれの割合をカイ二乗検定で比較した結果、5%以下の有意差があり、回答した割合に違いが認められた ($\chi^2=5.42$, $df=1$, $p<.05$)。

3) 自身の「音痴」意識と他者から「音痴」だと言われた経験との関連

質問3「他者(親、兄弟姉妹を含む)に『音痴』だと言われたことがありますか？」について、全校生徒を総合した結果を図4に示す。

「他者に『音痴』だと言われたことがありますか？」という質問に対して、「ある」に30.1%、「ない」に69.9%が回答した。また、質問3「他者に『音痴』だと言われたことがありますか？」と質問1「あなた自身、自分を『音痴』だと思いますか？」の結果につ

表2 「音痴」意識と意識を持ち始めた時期との関連

自分自身を「音痴」だと意識し始めた時期	非常に「音痴」だと思ふ		少々「音痴」だと思ふ		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
保育園・幼稚園	5	14.3	4	3.5	9	6.0
小学校	24	68.6	68	59.1	92	61.3
中学校	6	17.1	43	37.4	49	32.7
合 計	35	100	115	100	150	100

n=150

表3 「音痴」意識と意識を持ち始めた時期との関連(男女別)

性別	男 子		女 子		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
保育園・幼稚園	5	5.7	4	6.3	9	6.0
小学校	48	55.2	44	69.8	91	61.1
中学校	34	39.1	15	23.8	49	32.9
合 計	87	100	63	100	149	100

n=150

いて相関をみると、やや高い相関がみられた ($r=.44$, $p<.001$)。

質問3「他者に『音痴』だと言われたことがありますか?」の学年別の結果を図5に、男女別の結果を図6に示す。

他者から「音痴」だと言われた経験のある生徒は、学年別でみると、1年生では34.5%、2年生では29.3%、3年生では26.4%という結果であり、学年が上がるに従い、割合が低くなった。しかし、学年間の割合の違いについて、カイ二乗検定で比較した結果、1年生と2年生 ($\chi^2=0.65$, $df=1$, $p>.05$)、2年生と3年生 ($\chi^2=0.22$, $df=1$, $p>.05$)、さらに1年生と3年生 ($\chi^2=1.43$, $df=1$, $p>.05$) にも、それぞれの二つの群の間に5%以下の有意差は認められなかった。

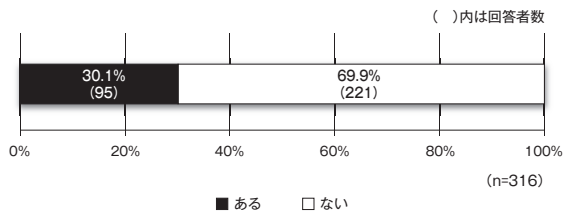


図4 質問:他者に「音痴」だと言われたことがありますか?

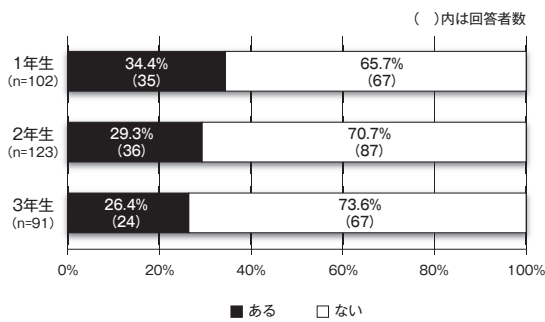


図5 質問:他者に「音痴」だと言われたことがありますか? (学年別)

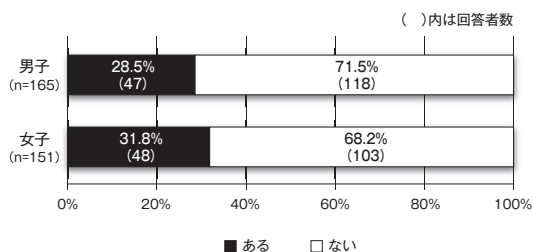


図6 質問:他者に「音痴」だと言われたことがありますか? (男女別)

また、男女別では、男子の28.5%、女子の31.8%が他者から「音痴」と言われた経験を有しており、それぞれの割合をカイ二乗検定で比較した結果、5%以下の有意差は認められなかった。 ($\chi^2=0.41$, $df=1$, $p>.05$)。

さらに質問4では、他者から「音痴」だと言われた経験のある生徒95名に対して、「誰から『音痴』だと言われたことがありますか?」という質問を行った(複数回答可)。結果を図7に示す。回答の多い順に、「兄弟姉妹」と回答した生徒が58.9%、「親」が56.8%、次に「クラスメート」が22.1%であった。「学校の先生」「ピアノなどの習い事の先生」と回答した生徒はいなかった。

3.2 「音痴」意識と発声・変声との関連

1) 自身の発声方法に対する認識との関連

質問5「あなたが歌う時、発声の方法が上手くいっていないと思いますか?」の回答について、男女別の結果を図8に示す。

男子は「そう思う」に6.7%、「ややそう思う」に29.7%、合計36.4%、女子は「とてもそう思う」に5.3%、「ややそう思う」に34.9%、合計40.2%の生徒が、「発声が上手くいっていない」と回答しており、女子の方が男子よりも発声が上手くいっていないと思う割合がやや高かった。また、発声方法が上手くいっていないかどうか「わからない」と答えたのは、男子は23.0%、女子は23.7%で、ほぼ同じであった。

また、上記の質問「あなたが歌う時、発声の方法が上手くいっていないと思いますか?」で、「わからない」と回答した生徒を除いて、質問1「あなた自身、自分を『音痴』だと思いませんか?」の回答との相関をみると、男子の相関係数は.35 ($p<.001$)、女子の相関係数は.43 ($p<.001$) となり、女子についてやや強い相関がみられた。

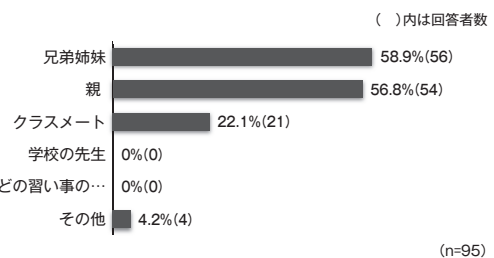


図7 質問:誰から「音痴」だと言われたことがありますか?

次に、発声方法が上手くいっていないかどうか「わからない」と回答している生徒について、男女別に、質問1「あなた自身、自分を『音痴』だと思いますか？」の回答との関連を図9に示す。

発声方法が上手くいっていないかどうか「わからない」生徒の中で、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」だと思うと回答した生徒の割合は、男子は63.2%、女子は33.3%という結果となった。発声が上手くいっていないかどうか「わからない」生徒については、男子の方が女子の約2倍、自分自身を「音痴」と意識しており、男女別の割合をカイ二乗検定で比較した結果、0.1%以下の有意差があった ($\chi^2=42.19$, $df=3$, $p<.001$)。

2) 変声との関連

男子を対象とした質問6「あなたの変声(声変わり)の時期についてお答えください」は、男子生徒を対象に、現在変声中であるかどうかを問うた質問である。「まだ変声期に入っていない」「現在変声中」「すでに変声期を終えた」「わからない」の中から各自1つを選択させた。学年別の結果を図10に示す。

「現在変声中」と回答した生徒の割合は、1年生で21.2%、2年生が20.9%、3年生が13.6%という結果となった。一方、「すでに変声期を終えた」と回答した生徒は、1年生が19.2%であるのに対して、2年生が52.2%、3年生が63.6%という結果であり、「すでに変声期を終えた」割合が、中学1年生から2年生にかけて大幅に増えた。

変声と本人の「音痴」意識との関連をみるために、「まだ変声期に入っていない」「現在変声中」「すでに変声期を終えた」「わからない」に回答したそれぞれの群における、質問1「あなた自身、自分を『音痴』だと思いますか？」の回答結果を図11に示す。

「非常に『音痴』」と「少々『音痴』」に回答した生徒を合わせると、「まだ変声期に入っていない」では54.5%、「現在変声中」では51.6%、「すでに変声期を終えた」では50.7%、「わからない」では54.0%という結果になった。

カイ二乗検定で比較した結果、「まだ変声期に入っていない」と「現在変声中」間の割合の違いについて、1%以下の有意差が認められた ($\chi^2=12.71$, $df=3$, $p<.01$)。しかし、「現在変声中」と「すでに変声期を終

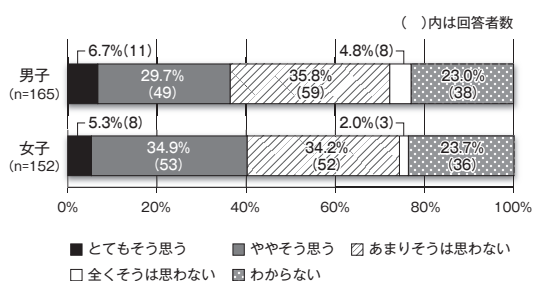


図8 質問：あなたが歌う時、発声の方法が上手くいっていないと思いますか？

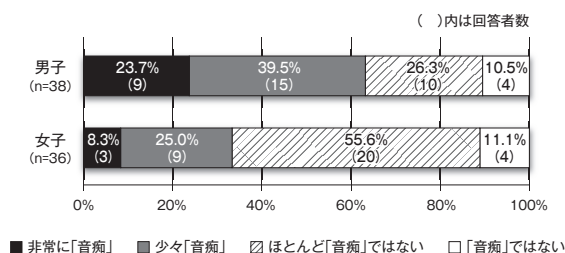


図9 発声の方法が上手くいっていないかどうか「わからない」生徒の「音痴」意識

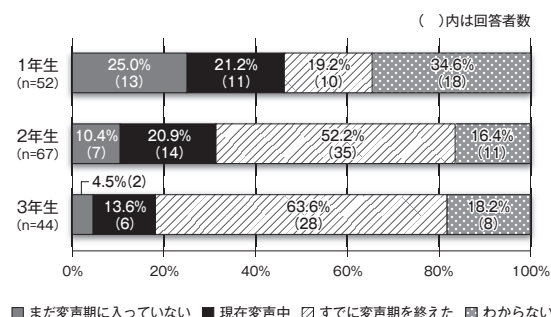


図10 現在変声中であるかどうか (対象：男子)

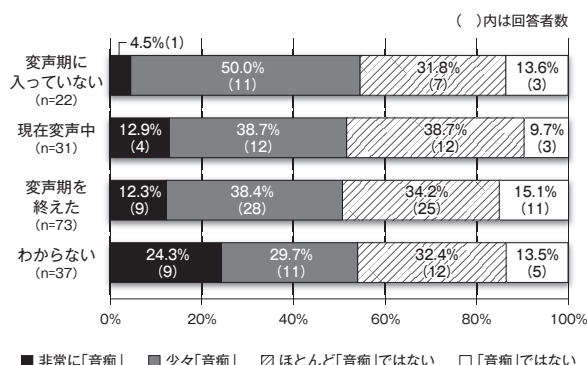


図11 変声期と本人の「音痴」意識との関連

えた」間の割合の違いについては、5%以下の有意差は認められなかった($\chi^2=2.31$, $df=3$, $p>.05$)。

「非常に『音痴』」と回答した生徒の割合に着目すると、「まだ変声期に入っていない」では4.5%であるのに対して、「現在変声中」では12.9%、「すでに変声期を終えた」では12.3%と高い割合である。さらに「わからない」と回答した群では24.3%の生徒が自身のことを「非常に『音痴』」だと意識している結果となった。

一方、「少々『音痴』」と回答した生徒の割合については、「まだ変声期に入っていない」の50.0%から、「現在変声中」では38.7%、「すでに変声期を終えた」では38.4%に減少した。

4 考察

4.1 中学生自身の「音痴」意識

ここでは、2000年、2013年に小学校教員養成課程に在籍する大学生を対象に行った「音痴」意識に関する調査結果(小畑 2002, 2018)(以下、「大学生を対象とした調査」と略記)との比較も含めて考察を行う。

今回調査対象とした中学1年生から3年生までの全校生徒の中で、自分自身を「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」と回答した生徒は47.8%おり、約5割の生徒が、自分自身を「音痴」だと意識していることが明らかとなった。小学校教員養成課程に在籍する大学生を対象とした2000年の調査では45.9%、2013年の調査では45.0%の学生が、自分自身を「音痴」だと意識している結果であったが、中学生の方が、自分自身を「音痴」だと意識している生徒の割合がやや高い傾向にあると思われる。

日本の中学校の音楽科において、歌唱活動が占める時間は決して少なくない。また、多くの中学校では校内合唱コンクールを実施しており¹、そのほとんどの学校が、本番に向けて、音楽の授業以外においても学級単位で合唱練習を行う時間を設けている。そのように歌唱活動が盛んであるにもかかわらず、実際は「音痴」意識を持っている生徒が約半数いるという実態が明らかとなった。

近年、日本人の青少年の自己評価の低さ、自己肯定

感の低さが指摘されている。また、合唱などの集団としての歌唱活動においては、他者からの評価(非言語活動も含める)が中学生に大きく影響する可能性が考えられる。

同時に、音楽科教員が、音楽の授業内での歌唱指導、特に合唱コンクールにおける合唱指導で、ややもすると集団としての合唱の出来栄を重視し、個々の生徒に応じた指導がおろそかになっている現実があることも危惧される。

自分自身を「音痴」だと思っている生徒の学年間における比較では、中学2年生で「音痴」意識を持っている割合が高い結果となった。中学1年生から2年生にかけては、「勉強嫌い」の生徒が増加することが指摘されており(東京大学社会科学研究所他 2017)、A中学校に限らず、中学2年生にみられる一般的な傾向である可能性もある。今回調査対象としたA中学校だけの特性であるのか否か、さらなる検証が必要であろう。

自分自身を「音痴」だと意識している生徒の男女別における比較では、男子の方が、女子よりも「音痴」だと意識している生徒の割合が高かった。大学生を対象とした調査では、男女の結果において有意差がみられておらず、中学生における特徴として位置づけられよう。

「音痴」だと意識し始めた時期については、今回の調査対象の中学生たちは、すでに小学生の時期に自分自身を「音痴」だと意識し始めた生徒が多いことが明らかになった。この結果は、「中学校」の頃の回答が最も多い大学生を対象とした調査と異なる。しかも、大学生を対象とした調査では、2000年の調査よりも2013年の調査の方が、「中学校」の頃に自分自身を「音痴」と思い始めたと回答した割合が増えていた。

今回の調査結果が、大学生を対象とした調査と異なった要因の一つとして、「いつ『音痴』だと思い始めたか」という質問が、対象者それぞれの過去の記憶に基づいて回答していることによる影響が考えられる。すなわち、対象となった中学生たちは、小学校を卒業してから中学1年生は7か月、中学3年生でも2年7か月しか経っておらず、大学生より記憶が新しい。大

1 2010年にベネッセ教育総合研究所が全国の中学校教員を対象に実施した調査では、85.0%の中学校が、「合唱などのコンクール」を「年に1回」実施していることが明らかとなっている(ベネッセ教育総合研究所 2011; 69)。

学生は小学校を卒業してから約8年経ており、たとえば、小学生の頃に、自分自身を「音痴」だと感じ始めたとしても、決定づけるような出来事が中学生の頃であれば、その記憶が強化され、本人としては「中学生の頃」と記憶として残る可能性は否定できない。今後の調査においては、「音痴」だと意識し始めた場面について、具体的な内容を尋ねる方法の検討が必要であろう。

同時に、大学生を対象とした調査と同様に、今回の調査でも、「非常に『音痴』」だと思ふ生徒の方が、「少々『音痴』」だと思ふ生徒よりも、小学生の頃に「音痴」だと思ひ始めた割合が高い傾向がみられた。小学生の頃に強い「音痴」意識を持った生徒は、その後も強い「音痴」意識を持ち続ける可能性が改めて示唆された。

「音痴」だと意識し始めた時期の男女別の結果では、女子の方が「小学校」と回答した割合が高かった。一般的に、男子よりも女子の方が身体発達や性的発達が早いと言われ、中学生では、自我発達水準も女子の方が高い(大野 2002)。このことが、女子の方が、男子よりも早い時期に、自身の歌唱について否定的に捉え始める傾向にも関連すると推察できる。

一方、小学生を対象とした縦断的な歌唱調査では(Obata 2013)、小学6年生の段階でも、約25%の生徒が歌いながら音高・音程が合っているかどうかの認知、すなわち内的フィードバック(小畑 2007)ができないことが明らかとなっている。

これらの結果を総合すると、小学校における歌唱指導においても、表出された歌声のみに着目するのではなく、個々の児童の認識に着目した指導が行われること、また児童が「音痴」意識を持つことのない指導が行われることの重要性が示されよう。

他者から「音痴」だと言われた経験の有無の割合については、学年別、男女別共に差がみられなかった。大学生を対象とした調査と同様に、他者から「音痴」だと言われたことが本人の「音痴」意識と関連していることが明らかとなった。

また、誰から「音痴」だと言われたかを問う質問では、「兄弟姉妹」「親」の回答が多く、家庭内で「音痴」と言われた経験を持つ生徒が多いことが明らかとなった。特に乳幼児期からの歌唱行動において、子どもの歌唱が親にどのように受け止められ、どのように共有されているかは、子どもが将来、自身の歌唱をどのよ

うに捉えるのかに大きく影響を及ぼすと考えられる。今回の調査結果からも、家庭での歌唱活動における関わり方の重要性が示唆された。

一方、「学校の先生」「ピアノなどの習い事の先生」と答えた生徒はいなかったが、大学生を対象とした調査では、2000年の調査(対象者の中学生時代は1992年～1996年頃)、2013年の調査(対象者の中学生時代は2005年～2009年頃)共に、「学校の先生」「ピアノの先生」という回答が少数であるが存在した。

調査は対象者が過去を振り返って書かれたものであり、単純に比較はできないが、今回の中学生を対象とした調査結果からは、歌唱を含めた音楽指導に携わる音楽の指導者が、「音痴」という語を使用しないようにする傾向にあることが推察できる。

4.2 発声と「音痴」意識との関連

発声に関する質問「あなたが歌う時、発声の方法が上手くいっていないと思いますか?」は、変声期中の男子が発声で苦慮していることを予想しての質問であったが、今回の調査では、女子の方が、男子よりも「上手くいっていない」と思う割合がやや高かった。この結果について、「歌う時」を日常的に歌う場面と捉えるのか、たとえば音楽の授業で合唱曲を歌う際の、ソプラノの高音を発声する場面と捉えるのかなど、回答者にとっての「歌う時」が、男女で質的に異なる可能性も考えられる。

また、発声方法が上手くいっていないかどうか「わからない」と回答した生徒を除き、「音痴」意識との相関をみたところ、女子についてやや強い相関がみられたことから、女子の場合、発声が上手くいっていないという認識が、本人の「音痴」意識に、より関係することが示唆された。

発声方法が上手くいっていないかどうか「わからない」と答えた生徒は、男女共、約25%の割合であり、これらの生徒は、自分自身の歌う際の発声の状態を客観的に捉えられていない可能性がある。さらに、この「わからない」と回答した男女別の本人の「音痴」意識をみたところ、「非常に『音痴』」もしくは「少々『音痴』」に回答した生徒は、女子が3割であったのに対し、男子では6割以上いることが明らかとなった。

この結果からは、自分自身の発声について「わからない」と回答した男子と女子の群とでは、何をもって

「発声方法が上手くいっていないかがわからない」と感じたのが質的に異なる可能性が示され、今後、さらに詳細な調査を行う必要がある。

男子に対して、現在変声中であるかどうか、変声の時期について問うた質問では、中学生が自分自身の変声についてどのように認識しているのかが明らかとなった。調査を実施した11月の段階では、「すでに変声期を終えた」と回答した生徒が、中学1年生で約2割であるのに対し、中学2年生になると約5割に増えており、中学1年生から2年生にかけて、変声期を終えたと認識した男子が多いことがわかった。

しかし、この質問において、1年生で最も高い割合を占めた回答は「わからない」であった。変声期に入っているかどうかを認識できず、自分自身の声の状態を客観的に捉えることが難しい生徒が多いことが明らかである。思春期の変声は、急激な大きな変化の急速期だけでなく、それに前後して緩やかで変化の小さな緩徐期が複合した現象である(斉田他 1990)。さらに、生徒それぞれによって、声域も声質も異なることから、変声前から自分の声や発声について、客観的に捉える視点ができていなければ、自分自身の声の変化についても「わからない」状態になる可能性が高い。

変声期と本人の「音痴」意識との関連では、「まだ変声期に入っていない」と「現在変声中」とを比較すると、自分自身を「音痴」だと思ふ生徒の割合は、「現在変声中」の方が低い結果となった。さらに、「現在変声中」と「すでに変声期を終えた」と回答した生徒の割合を比較しても、有意差がみられなかった。

中学生の特に男子の「音痴」意識については、一般的に、変声期が大きく影響していると認識される傾向がある。その考えが正しければ、「変声中」の生徒については、「音痴」だと意識している割合が高くなるであろう。しかし、今回の結果は、それを否定する結果となった。

その背景として、まず、「現在変声中」の群において、いくつかの傾向の生徒に分けられることが推察できる。たとえば、変声前には自身のことを「音痴」だと意識していなかった生徒が、変声期に入り、歌う際のコントロールが上手くできなくなり、「音痴」だと感じるケースが考えられる。他方で、変声前から自分自身のことを「音痴」だと思っていた生徒が、変声期に入り、「変声中」であることを理由に、逆に「『音痴』

ではない」と捉える可能性もある。つまり、歌唱において質的に異なるさまざまな生徒が混在しており、単純に「変声により『音痴』だと思ふ」という図式が成り立たないことがうかがえる。

しかし、変声期と生徒自身の「音痴」意識とが関係していないと結論づけるのも尚早である。「まだ変声期に入っていない」と「現在変声中」とを比較すると、自分自身を「音痴」だと思っている生徒は、「現在変声中」の方がやや低い割合となっているが、「非常に『音痴』」のみに着目すると、「現在変声中」の方が「まだ変声期に入っていない」に比べて、割合が高い。

加えて、「非常に『音痴』」だと思っている生徒について着目すると、「現在変声中」「すでに変声期を終えた」群よりも、変声に入っているかどうか「わからない」群において、約2倍高い割合で存在している。

さらに、自分自身のことを「音痴」だと思ふ人の中には、内的フィードバックができない人が少なからずいる。変声前に内的フィードバックができない生徒が、変声期に入った場合、自分の声のコントロールがより難しくなることが予想されるが、変声により内的フィードバックができるようになることは考えづらい。

正しい音高・音程で歌うためには、内的フィードバックができることが必須であるが、そのためには、歌いながら自分自身の歌声を客観的に聴けることが大前提になる。自分の発声状態や変声に対する認識についても、発声しながら、それを客観的に捉えることが必要である点で共通している。

歌う際には、生徒の体そのものが楽器となる。すなわち、声は生徒それぞれによって状態が異なる楽器であるともいえる。指導においては、音楽科教員が生徒それぞれの特徴の発声状態を捉えるという認識を持ち、全体の指導に偏らず、個々の生徒に対応した歌唱を含めた「声の指導」を行う必要があることが、今回の調査結果からは明らかである。

5 おわりに

今回の中学生を対象とした「音痴」意識に関する調査から、中学生の約5割が自分自身を「音痴」だと意識していることが明らかとなった。また、小学生のころから「音痴」意識を持ち始めた生徒が多く、特に家

庭で「音痴」だと言われた経験を持つ生徒が多いこともわかった。自身の発声に対する認識については、特に女子において「音痴」意識との関連がみられ、男子においては、変声を理由に自身を「音痴」だと意識するとは一概に捉えられないことが明らかとなった。大学生を対象とした調査との比較からもわかるように、中学生の段階では男女別の結果の差もみられ、個々の生徒に対応した歌唱も含めた声の指導を行うことの重要性が示唆された。

今後の課題として、第一に、今回の調査では、中学2年生が他の学年に比べて自分自身を「音痴」だと思っている生徒の割合が高かった。今後、他県の中学校も含め、複数の中学校で調査を実施し、特に、中学2年生の結果について、一般化できる傾向であるのかを検討する必要がある。また、生徒自身の自己意識、自己評価と「音痴」意識との関連についても精査する必要がある。

第二に、男子の変声と本人の「音痴」意識との関連については、変声前に内的フィードバックができていくかなど、さらに詳細な個別の調査と分析が必要であろう。

第三に、A中学校においては、今回の質問紙調査の実施と並行して、全生徒を対象に、内的フィードバックを中心とした個別の歌唱調査も実施した。本人の「音痴」意識と内的フィードバックを中心とする実際の歌唱との関連についても、分析を進めたい。

謝辞

本調査を実施するにあたりご協力いただきましたA中学校の先生方ならびに生徒の皆様に、心より感謝申し上げます。また、調査の実施、データの統計学的分析に関して、懇切な御教示を賜りました宮城学院女子大学教育学部教育学科教授松浦光和先生に、厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、平成28～30年度科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号16K04653)「中学生の自己肯定感向上に繋がる音痴克服のための歌唱指導法に関する実証的研究」の一部として行ったものである。

文献

- ベネッセ教育総合研究所(2011)「第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版)」『研究所報』62 ベネッセコーポレーション
- 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領』(平成29年告示)
- 大野和男(2002)「Loevingerによる自我発達理論に基づいた青年期における学年差・性差の検討」『発達心理学研究』13(2), 147-157.
- 小畑千尋(2002)「『音痴』意識の実態—専門高校生・大学生を対象とした意識調査—」『音楽教育学研究論集』第4号 pp.24-33.
- 小畑千尋(2007)「『音痴』克服の指導に関する実践的研究」多賀出版
- Obata, C. (2013) “ A longitudinal Study on Internal Feedback in Singing of Children: Through Analysis of Change from Fourth to Sixth Grades in a Primary School” The 9th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research (CDROM) 1-8 (No.32)
- 小畑千尋(2018)「大学生の歌唱における「音痴」意識—2000年と2013年の比較を中心として—」『宮城教育大学紀要』52巻 pp.17-179.
- 斉田晴仁・岡本途也・今泉敏・廣瀬肇(1990)「変声期の音声と身体発育について」『日本耳鼻咽喉科学会会報』93(4) pp.596-605.
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所(2017)「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2016 -親子パネル調査にみる意識と実態の変化-」速報版 https://berd.benesse.jp/up_images/research/2016_oyako_web_all.pdf (参照2018年9月24日)

(平成30年9月28日受理)

